天文学とプラネタリウム 第119回

www.tenpla.net

日本天文学会年会に合わせて、イベント開催！

今月のお題

こんなことにも天文学

天文学の役立ち方もさまざま。実はコミュニケーションを促進する力はなかなかすごいと思います。

高梨直紘（東京大学）
平松正顕（国立天文台チリ観測所）

天文学はいったいなんの役に立つのでしょうか？よく言われるのは、知的欲望を満たすといった精神的な側面や、青少年の健全育成などの教育的な側面、さらには最先端の技術開発に伴うスピンオフの産業化などの経済的な側面が挙げられます。知的欲望に忠実なのは確かだと思いますが、健全育成と言われても自分自身を振り返るとあまりピンときませんし、スピンオフと言っても経済にインパクトを与えるほどの規模のものはこれまでになかったように思います。

コミュニケーションを促す天文学

なにかの役に立たなきゃいけない…と考えるとちょっとしんどいですが、こんなことの役にも立ってる、というのであればもっといろいろ考えられそうです。例えば人々のコミュニケーションを促進する力は、天文学はピカイチ。天体観望会などのシーンを思い浮かべてみれば、ちょっと非日常な空間の中で、ふだんはあまり会話を交わすことのない人同士でも気軽に声を掛け合える雰囲気があります。月や星を見れば綺麗だなぁと素直に思えますし、流れ星が流れればドキドキする、そんな一体感が満ちています。薄暗い中で互いの顔もはっきり見えないのも、話しやすい要因のひとつでしょう。天文分野の対話イベントも、同様です。138 億年の歴史に思いを馳せれば、日常的なレベルの悩みはひとまずどこかに置いてくることができるでしょう。また取りに戻らねばいけないのがつらいところではありますが。

このような特徴は、天文学があまりに非日常の世界にあるために、日常的な利害関係や価値判断を軽々と超越していることに起因するように思います。ずっと遠くに焦点を合わせれば、近くの世界はぼやけてしまってどうでもよくなる感じと言えば良いでしょうか。これが天文学の強みのひとつならば、活用しなければもったいない。というわけで、この特徴を積極的に活用し、地域活性化に貢献するような可能性を探っています。

一緒に考えているのは、東京大学の「共生のための国際哲学研究センター」（UTCP）のグループ。名前の通り、哲学分野の研究グループです。地域が抱えるさまざまな社会的課題に対し、哲学対話と呼ばれる手法を用いた取り組みを行っています。日常的には直接の利害関係にある人同士でも、課題の枠組みを変えることで、建設的な議論をしやすくなります。一度焦点を他のところにもっていくことで対話を促進させる方法論は、天文学におけるコミュニケーション活動の特徴ともそっくり。12 月 20 日には六本木ヒルズで「宇宙の哲学対話」イベントを行いましたが、今後も天プラも協力した企画を予定しています。詳細はまた後日！



天体観望会は見知らぬ人とも素直に会話できる雰囲気があります。